

IV 調査の総括

群馬県下出土の布留式甕について

1. はじめに

高崎市・中居町一丁目遺跡では、調査面第2面の遺構外から、古墳時代前期の土器の小破片8点が出土した(図17)。これらは調査区域東半部の低地を中心に出土したが、周辺に該期の遺構はなく、また摩滅の痕跡が少ないことから、周辺の微高地から流れ込んだものと思われる。

これらの中に器肉が約2mmと薄く、外面に横撫で、内面に横位篋削りを施す甕が存在する(図17-1)。これはその整形技法と、想定する器形の特徴から、近畿地方から直接搬入された布留式土器か、或いはその影響下で作られた布留式系土器に比定されるものと考えられる。

同様な土器は、東側に隣接する平成17年調査の中居町一丁目遺跡((財)群馬県埋文事業団2007)での確認例はないが、西側に隣接する上中居遺跡群で出土例が確認されている(高崎市教委2009)。しかし、群馬県下において布留式土器の甕(以下「布留式甕」)或いは布留式系土器の甕(以下「布留式系甕」)の出土例は極めて少なく、その様相には不明な点が多い^{*1}。

したがって、ここでは群馬県下で出土した古墳時代前期の布留式甕或いは布留式系甕を、主として伴出するS字状口縁台付甕(以下「S字甕」)とともに概観し、その様相の一端を明らかにしたい。なお、土器が搬入品か否かの判定は難しいが、ここでは上中居遺跡群を除いて搬入品の可能性のある布留式甕を対象とした。

2. 群馬県出土の主な布留式甕

上中居遺跡群 S Z 1 (高崎市上中居町, 図18, 高崎市教委2009): 内法9.3mの方形周溝墓(S Z 1)の周溝内から、甕の上半部が出土している(図18-1)。口唇部は丸く収めるが胴部外面に浅い不定方向の刷毛目、内面に斜位の篋削りを施す。報告者は、布留甕とS字甕の折衷土器との判断をしている。S字甕と単口縁の甕が伴出する。

寺尾町下遺跡遺物集中点下面(高崎市寺尾町, 図19, (財)群馬県埋文事業団2002): 遺物集中地点から、甕の上半部や口縁部6点が出土している(図19-1~6)。いずれも口唇部を僅かに内側に肥厚させ、胴部外面に横位刷毛目、内面に横位・斜横位の篋削りを施す。調査時に

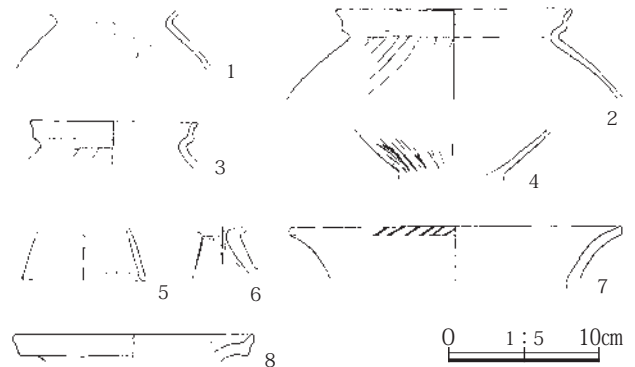


図17 中居町一丁目遺跡遺構外出土遺物

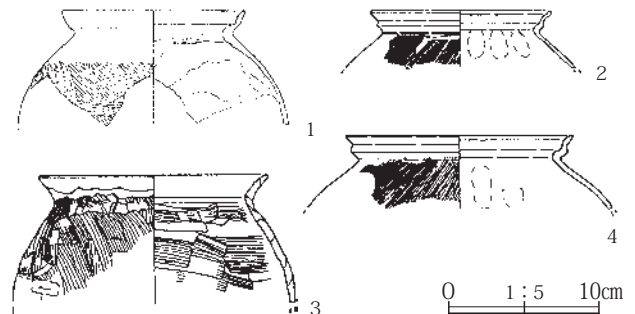


図18 上中居遺跡群方形周溝墓(S Z 1)出土遺物

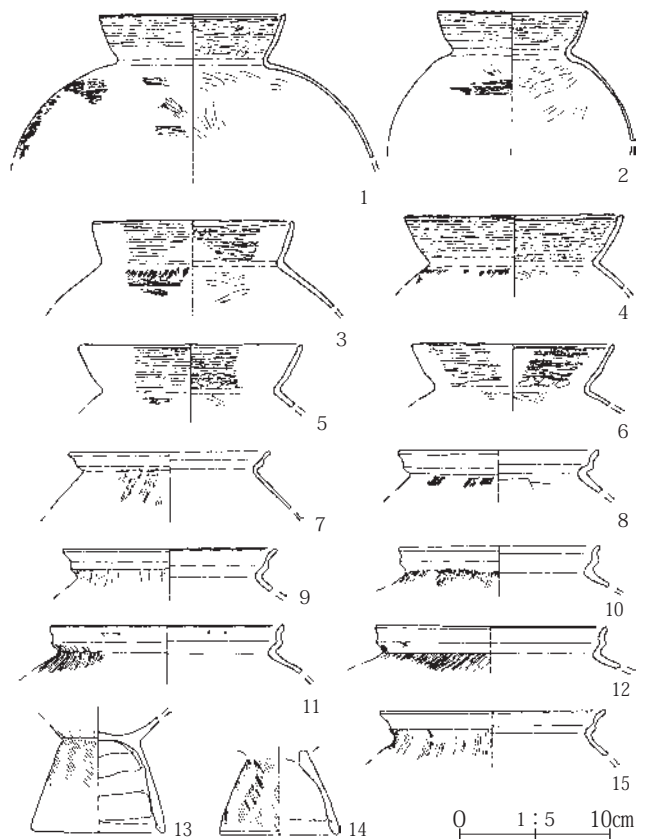


図19 寺尾町下遺跡遺物集中点下面出土遺物

IV 調査の総括

において、出土層位は伴出遺物とともに必ずしも明確に把握されている訳ではなく、掲載したS字甕は筆者の抽出によるもので、これらの同時性は明らかではない。

山王若宮Ⅱ遺跡H-2号住居(前橋市山王町, 図20, 前橋市埋文発掘調査団2000): 一辺5.9mのH-2号住居から、甕の上半部1点が出土している(図20-1)。口唇部を内側に小さく肥厚させ、口縁部内外面に横撫で、胴部外面に斜縦位刷毛目後横位刷毛目、胴部内面は頸部のやや下位まで横位篋削りを施す。伴出するS字甕は肩部に横位羽毛目を施すものが存在するが、口縁部の外反度はやや強くその段差は比較的弱い。

磯之宮遺跡9号住居(太田市大字台之郷, 図21, 太田市教委1986): 短軸6.8m、長軸7.6mの9号住居から、下位を欠損した甕が出土している(図21-1)。口唇部を内側に小さく肥厚させ、口縁部内外面に横撫で、胴部外面に斜縦位刷毛目後横位刷毛目、胴部内面は頸部のやや下位まで斜横位篋削りを施す。報告によると、同様な甕で別個体の胴部片が出土している。S字甕と単口縁で平底の甕(以下「平甕」)が伴出する。S字甕は肩部に横位羽毛目を施し、口縁部外面の屈曲は明瞭だが、内面に段差はほとんど認められない(図21-2)。

富沢古墳群13号住居(太田市大字富沢, 図22, 太田市教委1991): 短軸5.5m、長軸6.5mの13号住居から、甕1点が出土している(図22-1)。口唇部を内側に小さく肥厚させ、口縁部内外面に横撫で、胴部外面に斜縦位羽毛目、内面は上半に斜横位羽毛目後、間隔を空けた縦位指撫で、下半に横位篋撫でを施し、主として上半に指頭圧痕を残す。伴出遺物には平甕、埴、高坏、器台、壺などがあるが、S字甕は出土していない。

御正作遺跡11号土坑(邑楽郡大泉町下小泉, 図23, 大泉町教委1984): 直径35cm、深さ40cmの半円形を呈する11号土坑の覆土中位から、下位を欠損した甕1点が出土している(図23-1)。口唇部は丸く収めるようであるが、胴部外面上半に斜縦位羽毛目後斜横位羽毛目、内面に斜横位篋削りを施す。覆土中より埴の上半部、高坏の脚部が出土し、報告では甕の台部が出土したとある。

一本杉Ⅱ遺跡26号溝(旧新田郡新田町村田, 図24, 新田町教委2000): 幅1.3～2.0m、深さ0～35cmの26号溝の覆土内から、甕の上半部1点が出土している(図24-1)。口唇部を僅かに内側に肥厚させ、口縁部内外面に

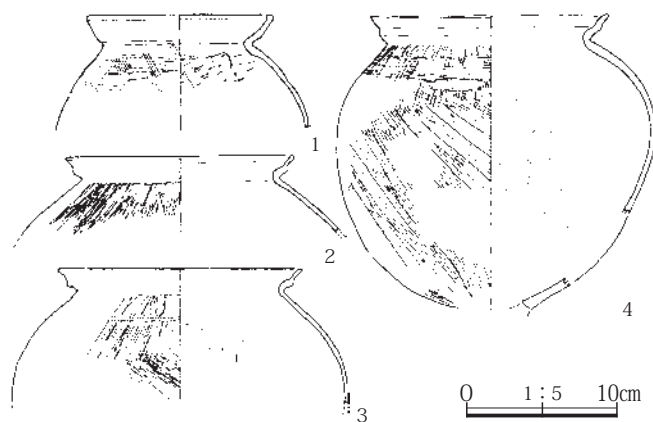


図20 山王若宮Ⅱ遺跡H-2号住居出土遺物

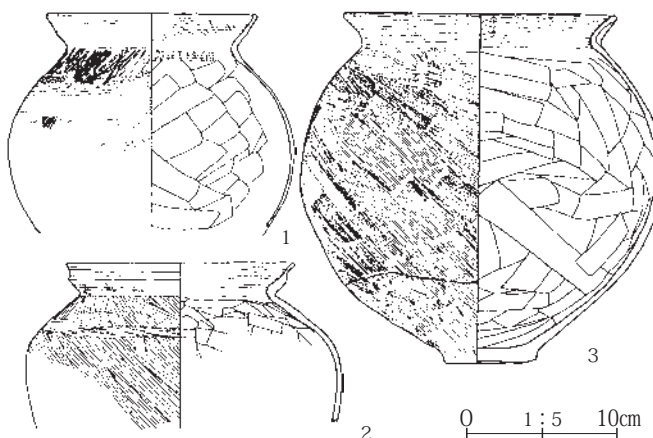


図21 磯之宮遺跡9号住居出土遺物

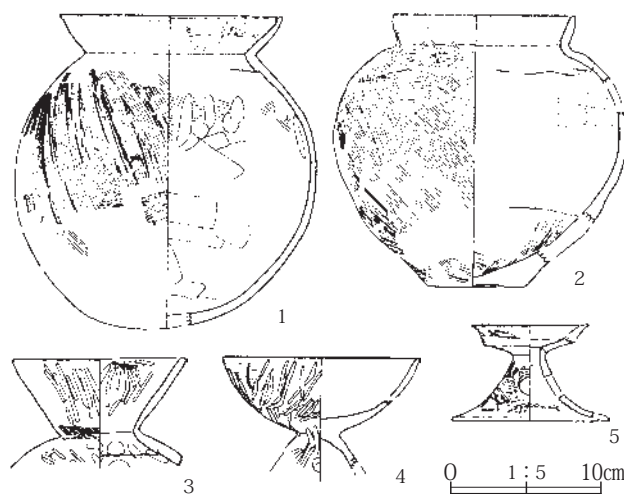


図22 富沢古墳群13号住居出土遺物

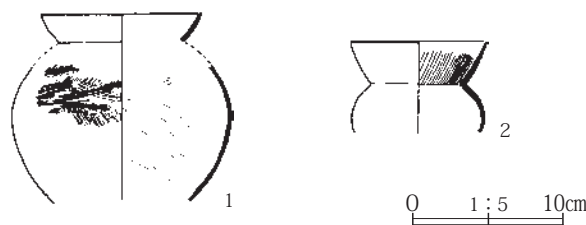


図23 御正作遺跡11号土坑出土遺物

横撫で、胴部外面に縦位・横位羽毛目、内面に横位篋削りを施す。埴、器台、高坏、壺、単口縁甕などの他、多量のS字甕が伴出する。S字甕は口縁部などに形態の差が認められ、覆土の中・下位からの出土であることを考慮すると、これらは全て同時期ではなくある程度の時間幅をもつ可能性が高い。なお、掲載した土器群は筆者の抽出による出土遺物の極一部で、これらの同時性は明らかではない。

以上、県下の布留式甕、或いはその影響下で作られたと考えられる布留式系甕を概観してきた。この他にも例えば行幸田山遺跡1号墳(渋川市)、脇屋深町遺跡1号住居(太田市)、熊野堂遺跡4区22号住居(旧群馬郡群馬町)などの出土例があるが、これらはいずれも布留式甕の模倣である可能性が高いものと判断されるので、ここではとりえず割愛した。

3. 群馬県下における布留式甕の分布

2章で概観した布留式甕の分布状況を概観すると、県下に広く分布するのではなく、大きくは高崎市周辺と太田市周辺の二か所にその分布が集中していることが分かる(図25)。全体の類例が少ないことから、この分布傾向の確実性が高いとは言えないが、例えばこれに先述した明らかに布留式甕を模倣した例を加えたとしても、この偏在性を大きく覆す状況には至らない。

また、群馬県下では昭和40年代以降、高速自動車道、新幹線、工業・住宅団地、ほ場整備などの大規模開発に伴う発掘調査が進行し、膨大な量の考古資料が蓄積されてきたことを考慮すると、今後この類の資料が飛躍的に増加する可能性は低いものと考えられる。

したがって、県下における布留式甕は、いずれも平野部の高崎市周辺と太田市周辺を中心とした偏在する二極の分布を、その傾向として看取することができる。

4. 県下の布留式甕とS字甕の型式比定と平行性

ここでは2章で概観した布留式甕の型式比定と、伴出するS字甕との平行性について検討してみたい。

中居町一丁目遺跡の布留式甕は、小破片のために詳細な比定は不可能であるが、整形技法の特徴などから布留式の古段階に位置付けられるものと考えられる。一方、これと同様に遺構外から出土したS字甕は、口縁部及び胴部の形状から東海地方S字甕編年(赤塚1986・1988)のC類段階の特徴を備えている。

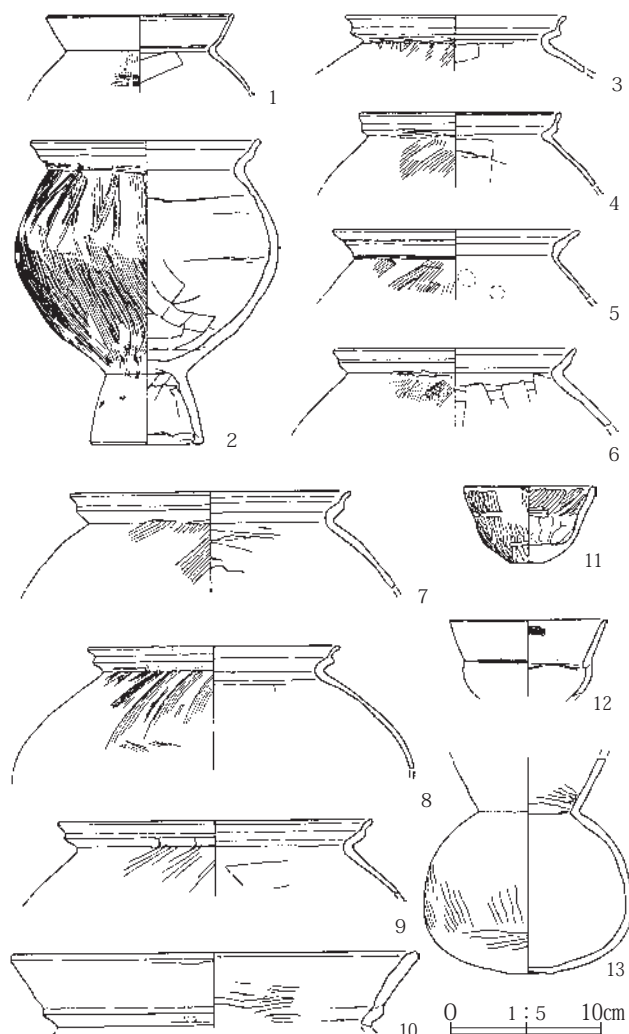
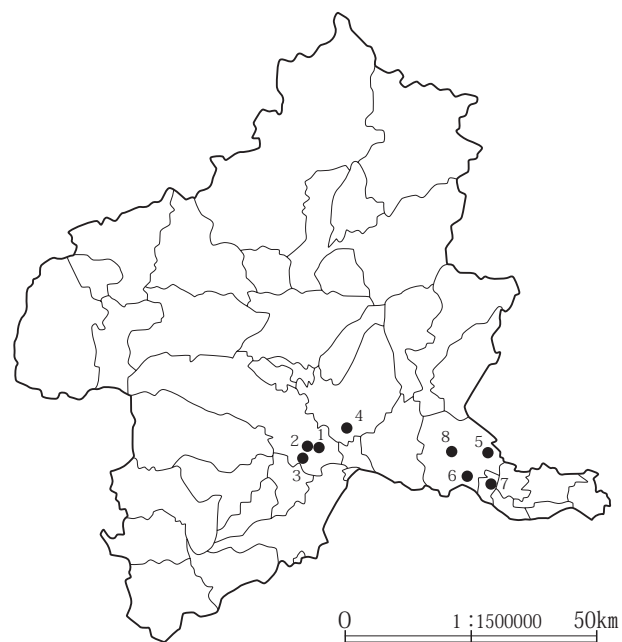


図24 一本杉Ⅱ遺跡26号溝出土遺物



1:中居町一丁目遺跡 2:上中居遺跡群 3:寺尾町下遺跡 4:山王宮Ⅱ遺跡 5:磯之宮遺跡 6:富沢古墳群 7:御正作遺跡 8:一本杉Ⅱ遺跡

図25 布留式土器出土遺跡位置図

IV 調査の総括

寺尾町下遺跡の布留式甕は、6個体の甕の口縁部にそれぞれ僅かな形態の差が認められ、伴出するS字甕にも同様な傾向が認められる。したがって、これらはある程度の時間幅をもつ可能性が高いが、口縁部の形状、胴部内面の篋削りの状況などから、総体的には布留式の古段階に位置付けられるものと考えられる。一方、S字甕は口縁部の形態がC・D類段階の特徴を備えている。但し、中居町一丁目遺跡と同様に、出土状況からこれらの同時性は明らかではない。

山王若宮Ⅱ遺跡の布留式甕は、口縁部の形状と頸部のやや下位まで施す胴部内面の篋削りの状況から、布留式の古段階に位置付けられる。一方、伴出するS字甕は肩部に横位羽毛目を施すものが存在するが、口縁部の形状からC類段階に位置付けられる。

磯之宮遺跡の布留式甕は、口縁部の形状と頸部の下位まで施す胴部内面の篋削りの状況から、布留式の古段階に位置付けられる。一方、S字甕は肩部に横位羽毛目を施し、受口状の口縁部を呈すことからB類段階と考えられ、あえて言えばその新段階に比定できよう。

富沢古墳群の布留式甕は、口縁部の形状から布留式の古段階に位置付けられる。この住居にS字甕はないが、伴出する埴、高坏、器台の様相は、S字甕のほぼC類段階に平行するものと考えられる。一本杉Ⅱ遺跡の布留式甕は、口縁部の形状と頸部の下位まで施す胴部内面の篋削りの状況から、布留式の古段階に位置付けられる。一方、伴出するS字甕は口縁部に形態の差が認められ、これらはある程度の時間幅をもつが、大勢としてC・D類段階の特徴を備えている。

以上、布留式甕とS字甕の型式比定を雑駁に試みた。この比定が正しいとすれば、ここに提示した布留式甕の多くは、大勢として布留式の古段階に位置付けられることになる。また、伴出するS字甕は必ずしもその共伴関係が確実とは言えないが、大勢としてC・D類段階に位置付けられ、共伴関係が比較的確実な山王若宮Ⅱ遺跡の例からは、C類段階がほぼ平行するものと考えられよう。但し、磯之宮遺跡のようにB類段階まで遡るものが存在することから、その一部はB類新段階に平行する可能性が考えられる。

さて、畿内大和と東海地方伊勢湾沿岸の土器の平行性について、布留式の古段階である布留0・1式は、伊勢

湾沿岸の廻間Ⅱ式新段階からⅢ式にかけて平行するとされている(赤塚2002)。したがって、布留式の古段階は、S字甕のB類新段階からC類にかけて平行することになる。つまり、これは先の群馬県下における布留式甕とS字甕との平行関係とほぼ一致し、その平行関係に大きな矛盾がないことの証左となろう。

5. まとめ

以上、県下で出土した布留式甕或いは布留式系甕を、主として伴出するS字甕とともに概観してきた。類例が少ないことからその様相は不明な点が多いが、現時点では高崎市周辺と太田市周辺の二極集中的な分布を示し、おそらく今後もこの図式が大きく変わる可能性は低い。また、出土した布留式甕の多くはその古段階に属し、東海地方におけるS字甕編年の、B類新段階～C類段階に平行する可能性が高いものとの想定が可能である。

なお、先述したように今後この類の資料が飛躍的に増加する可能性は低い。したがって、これが布留式甕の実態を示している可能性が高く、むしろこの類例の少なさに何らかの意味があるものと考えられる。また、ここではその認識が比較的容易な甕を対象としたが、例えば埴、高坏、壺なども含めて、布留式土器の分布の史的意義を検討することが今後の課題となろう。

本稿の作成にあたって、赤塚次郎・関川尚功・田中清美・寺沢薫・深澤敦仁・三浦京子・右島和夫各氏からご指導を頂き、関川尚功・寺沢薫氏には、一部の布留式甕を実見して頂き、そのご所見を賜った。文末ながら、記して深甚なる感謝の意を表す次第です。

引用・参考文献

- 赤塚次郎 1986 「「S字甕」覚書'85」『年報昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎 1988 「最後の台付甕」『古代』第86号 早稲田大学考古学会
赤塚次郎 2002 「土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観』第2巻 弥生・古墳時代 土器Ⅱ 小学館
大泉町教育委員会 1984 『御正作遺跡』
太田市教育委員会 1986 『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報』
太田市教育委員会 1991 『埋蔵文化財発掘調査年報1』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『寺尾町下遺跡』
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『中居町一丁目遺跡』
高崎市教育委員会 2009 『上中居遺跡群』
寺沢 薫 1987 「布留0式土器拡散論」『同志社大学考古学シリーズⅢ』同志社大学考古学シリーズ刊行会
西川修一 1993 「関東における布留系土器について」『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会
新田町教育委員会 2000 『新田東部遺跡群Ⅱ(一本杉Ⅱ遺跡)』
前橋市埋文発掘調査団 2000 『山王若宮Ⅱ遺跡』

※1 群馬県下出土の布留式甕或いは布留式系土器に関する論考はほとんどなく、僅かに関東地方の布留式系土器を集成した西川修一氏によって扱われている程度である(西川1993)。